



修築を終えた第一鳥居。奥には第二鳥居が見える。

ご挨拶

昨年は天皇陛下御即位に伴う御大典が行われた年でありました。十月二十二日、「即位礼正殿の儀」が行われ、天皇陛下におかれましては国の内外に即位を宣明されました。その折、天皇陛下は「上皇陛下が三十年以上にわたる御在位の間、常に国民の幸せと世界の平和を願われ、いかなる時も国民と苦楽を共にされながら、その御心を御自身のお姿で示しになってきたことに、改めて深く思いを致し、ここに、国民の幸せと世界の平和を常に願い、国民に寄り添いながら（省略）」とお言葉を述べられました。神武天皇様の建国の詔を拝しますと「為政者たるものは人々の生活を第一に考える

べきである。人々が何を望んでいるのか、幸せに暮らすには何が必要かを考える実行すべきである」と仰っています。神武天皇様をはじめ歴代天皇は何時の時代にあっても人々を第一に思い寄り添っておられました。「即位礼正殿の儀」での天皇陛下のお言葉から御祖先神武天皇様の大御心が百二十六代の天皇陛下にも受け継がれていると拝察するのであります。また十一月九日に皇居前広場で行われました天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典に私も行って参りました。寒い中ではございましたが、二重橋に百二十六代皇統連綿と続く天皇皇后両陛下がお出ましになられた折には、万感胸に迫る思いでありました。さらに十一月二十七日、天皇皇后両陛下は即位礼及び大嘗祭



かしはら

第176号

令和二年

紀元2680年

- 橿原神宮鳥居修築工事を終えて
- 橿原神宮史経編の編纂を終えるにあたって
- 御鎮座百三十年記念奉祝事業
- 鳥居修築工事完工報告



を無事に終えられたことを神武天皇様へ御奉告される「親謁の儀」に臨まれるため、この檀原の地にお越しになりました。両陛下が神武天皇陵に向かわれる沿道には多くの方が奉迎の為に集まり、檀原の地を御出立の際も奉送の方々に沿道は溢れかえっております。

思えば、檀原神宮がこの地に鎮座致しましたのも、地元民間有志の神武天皇延いては皇室に対する篤い思いがあったからに他なりません。この人々の篤志によって鎮座した檀原神宮はこの春、百三十年を迎えます。毎年、四月二日は御鎮座記念祭を齋行しておりますが、本年は御鎮座百三十年記念大祭として齋行すべく準備を進めております。この度の奉祝事業と致しまして、貴賓館をはじめ各館の改修工事、社頭・参道の環境整備等を行って参りました。その中でも主たる事業と致しまして昭和十五年、紀元二千六百年の奉祝事業の一環として社殿神域の拡張工事を行った際に建てられた鳥居四基の修築工事、昭和十七年から神武天皇二千六百年大祭を齋行致しました平成二十八年までをまとめた檀原神宮史統編の編纂並びに神武天皇論の作成を行いました。全国崇敬者の方々のお力添えを賜り無事業を終えることが出来ましたことは誠にありがたいことでございます。

本報での記念事業の報告と致しまして鳥居の修築を御担

当頂いた株式会社瀧川寺社建築の瀧川伸代表取締役、檀原神宮史統編の編纂において現場で指揮を執って下さった皇學館大学の田浦雅徳特命教授に御寄稿を賜りました。この場を借りて御礼申し上げますとともに、崇敬者皆様には是非とも御一読賜りたく存じます。

また、令和二年の本年は世界的なスポーツの祭典である東京オリンピックが開催されます。開催に先立ち行われる聖火リレーでは檀原神宮外苑ともいえる県立檀原公苑陸上競技場が聖火到着を祝うセレブレーション会場に予定されているのでございます。神武天皇様は「八紘一字」という精神について述べられておられます。この精神とは、地球上に住むすべての民族があたかも一軒の家に住むように仲良く暮らすこと、つまりは世界平和の理想のことでございます。この「八紘一字」の精神は「スポーツを通じて平和な世界の実現に寄与する」というオリンピックの精神に通じるものがあります。檀原神宮にとりましても記念すべき年に万世一系の天皇を戴くこの日本から御祭神神武天皇様の大御心が世界中に遍く広がることを願ってやみません。

檀原神宮宮司 久保田昌孝

檀原神宮鳥居修築工事を終えて

株式会社瀧川寺社建築 代表取締役 瀧川伸

檀原神宮御鎮座百三十年を迎えるにあたり、昭和十五年紀元二千六百年を奉祝して建てられた四基の鳥居修築工事にご縁を頂き、私共を技術者として御指名して頂いた事を光栄に思います。

弊社は平成に入って平城宮跡朱雀門・大極殿正殿・興福寺中金堂と大型木造建築を手掛けてまいりましたが、直径八十センチメートルを超える無垢の柱を扱う事は御座いませんでした。

神宮の鳥居の事前調査の際に、四基の鳥居の規模を実測させて頂き、数字で見るとその桁外れの大きさには目を見張るものがありました。

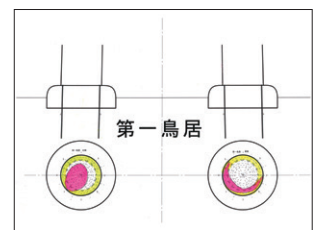
その規模は、第一鳥居、柱間七・五七五メートル、柱径一・〇メートル、総高さ一〇メートル、総幅一四メートルを基準として、その他の鳥居は神域に近い第二鳥居が一・一倍、北参道鳥居が〇・九倍、西参道鳥居が〇・六倍、鳥居の木割り（設計の目安）は柱径の七・五倍を柱間、一〇倍を総高さ、一四倍を総幅としておりました。

八十年前に使用されていた神宮の御用材は台湾の阿里山から国家事業として運ばれてきたと聞いております。

経年変化による柱の劣化具合を計測するため、奈良県森林技術センターの先生方にご協力を得てレジストグラフ（一ミリメートル程度の小さなドリルで穴をあけてその抵抗力の値で腐朽の浸食度合いを測る）検査を行いました（写真①②）。



写真①



写真②

主に柱脚部分の腐朽菌に於ける痛みが激しく通常規模の鳥居では二十〜三十年に一度の造宮で柱が取り換えられるものを、大径木ゆえに幾度も手を加えてきた形跡からも、八十年間維持管理されてこられた神社関係者の方々のご苦勞は一方ならぬものがあったと思われまます。

この調査で柱の足元部分と貫材に取替を要する劣化が見られ、また宮司様の「八十年前の紀元二千六百年事業に使われた御用材を出来る限り残したい」という強いご意向を頂き、柱と貫を新材に、そして再利用する笠木・島木・額束の台湾桧材の劣化部分を元の柱と貫材を転用して補修する工法を取らせて頂きました。

木材の調達には奈良県桜井市の大径木を扱う株式会社金幸が五年前からカナダより森林認証を受けた米桧葉（ベイヒバ・イエローシダー）を名古屋の貯木池にて保管し、工事の一年前に製材し乾燥を施して頂きました（写真③）。その樹齢のほとんどが八百年〜一千年、最も大きかった第二鳥居の南側柱に使われた御用材は一千七百年を数えました（写真④）。



写真③



写真④

工事は順調に進み、昨年の九月より第二鳥居・第一鳥居・西参道鳥居を解体し、北参道鳥居を今年の五月に解体させて頂きました。第一期工事として第一鳥居・西参道鳥居を修築し平成三十一年三月二十六日の「天皇皇后両陛下 奈良県行幸啓」での神武天皇山陵へ親調の儀に向かわれる際にご覧頂くことが出来ました事、嬉しく思います(写真⑤⑥)。



写真⑤



写真⑥

続いて第二期工事で北参道鳥居、そして御神前に一番近い第二鳥居に取り掛かりました。

昨今、鳥居の柱が柱脚部分で腐朽する事に伴う断面欠損から、ある日突然倒壊することが全国で見受けられ、その対策が急務

とされています。

弊社では十年以上前から「腐りにくい掘立柱工法」について、鳥居や門等の工作物に於いて実績を重ねてまいりました。

その技術は木材を本来の木の生育したままの姿で地上に立てる事を目的としたものです。柱の柱脚部分をステンレス金物で覆い、予め基礎の中に設置してある受金物の中に、概ね柱直径と同等の深さを埋め込むだけで柱脚を完全に固定し、柱にボルト穴を一切開ける事無く、現在の木造建築では難しいとされる剛接合に近づけています(写真⑦⑧)。



写真⑦



写真⑧

これにより、地震力に対して構造上必要な水平耐力を確保するとともに、地面から礎石の高さをステンレス金物で立ち上げ、地面上の水分を寄せ付けないことで耐久性を高める構造です(写真⑨⑩)。

柱を覆った内側金物と基礎に埋設された金物に数センチの隙間を作り地面より十二センチメートル下まで乾き砂を埋め、残る十二センチメートルに高強度モルタルを打つ事で、強固に固定します。数十年後の将来に訪れるメンテナンス工事の際に、モルタルを割る事によって柱を簡単に抜き取る事ができます。

鳥居は建築基準法に於いては工作物に該当し、ある一定の規模（高さ十五メートル、床面積十平方メートル）以内であれば建築確認申請の必要は無く、腐朽菌に関しての規制は特に設けられてはおりません。しかし我々の技術は、様々な工夫を施すことにより、鳥居部材の大きな断面を活かした高い強度性能と剛性を実現し、更に想定外の地震の際には柱高さに対して層間変形角十分の一ラジアン（高さに対して約十分の一の水平変位）まで木材の変形性能を保つ構造となっています。腐朽菌などの長期的な劣化に対しても十分な対策を施しています。

その柱脚部分の施工精度は限りなく±0ミリメートルの世界で、四基の鳥居を表現しております。

すべての鳥居で、わずか一日で部材の建て方を終える事が出来るのは、この施工精度有ったの事と自負しています(写真⑨～⑱)。



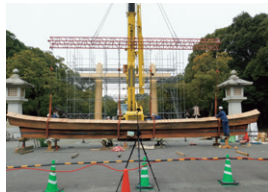
写真⑨



写真⑩



写真⑰



写真⑮



写真⑬



写真⑪



写真⑱



写真⑯

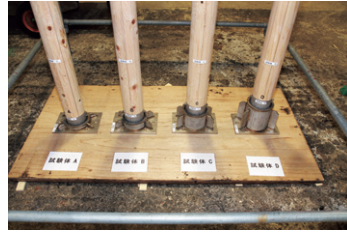


写真⑭

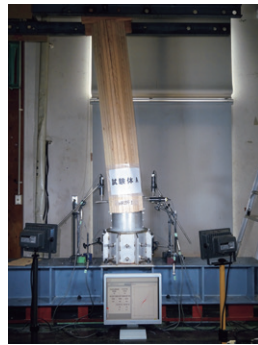


写真⑫

このような「木柱の掘立柱工法」は、京都市大学生存圏研究所及び奈良県森林技術センターと共同研究を行い、実証、実験を繰り返しながら、性能向上と評価に取り組んで参りました（写真⑱⑲⑳）。



写真⑱



写真⑲

その実験と改善から生まれた弊社の特許技術を「高耐震・高耐久 令和の掘立柱工法」と命名しました。

令和元年九月に特許を取得し、海外に於いても共通の木造建築の文化を持つ中国と韓国に国際出願致しました。

さらに日本国でも最大級の木製鳥居である橿原神宮境内の修築工事に際しては、大地震時において倒壊しない旨の安全確認を行うべく、その耐震性を建築構造評定の権威である日本建築センター（BCJ）で、限界耐力計算を用いて、鳥居では全国初めてとなる、BCJ評定を取得しています。

今できる限りの技術を駆使し、様々なアイデアを施し、二年に及ぶ鳥居の修築工事も昨年十二月二十四日に竣工奉告祭を迎える事ができました。

伝統的木造建造物を保存し、活用していくには、変えてはならない基軸となる技術や工法があります。ですが一方では先人の技術を読みとり、不足分を補う為に新しいものを取り入れ、革新を加えてゆかなければ守っていけない事も事実です。これからも「不易流行」の精神で、橿原神宮の境内建物の維持管理に貢献できる事を願っております。

プロフィール 瀧川 伸(たきがわ しん)

- 平成四年三月 近畿大学大学院工学研究科 建築学専攻 修了(建築史意匠研究室)
- 一級建築士・一級建築施工管理士・一級土木施工管理士・一級管工事施工管理士 平成四年四月より家業である瀧川神社建築に従事。
- 平成五年九月 株式会社瀧川神社建築 法人設立とともに専務取締役就任。同年、一級建築士事務所設立の際に管理建築士となる。
- 国宝室生寺五重塔保存修理、国宝長谷寺本堂修理、東京椿山荘三重塔修理、成相寺五重塔新築工事、平城宮跡朱雀門・大極殿正殿・法隆寺百済観音堂・京都御所飛香舎・興福寺中金堂等の工事に関与し、直接、設計や施工を担当した建物は大小併せて一百七十棟を超える。
- 近年、「木柱の設置工法」というタイトルで古来から伝わる「掘立柱」の工法で木部が簡単に腐らない耐震技術を開発し、七年前に第一回目の特許を取得。
- 現在五つ目の特許を中国・韓国にも国際出願中。
- 石上神宮、枚岡神社の明神鳥居にもその技術を採用頂き、昨年、国内最大級の橿原神宮木造鳥居四基を修築。

田浦 雅徳


 御鎮座百三十年記念出版物作成事業の開始

平成二十八年の夏から始まった、檀原神宮御鎮座百三十年記念「檀原神宮史編纂事業」もようやく完成に近づいてきた。ここまでたどりえたことを、神武天皇の御霊に感謝申し上げるとともに、関係各位に心より御礼申し上げたい。

皇學館大学の当時の清水潔学長が、檀原神宮久保田昌孝宮司より本記念事業への協力依頼を受け、「檀原神宮御鎮座百三十年記念出版物について」と題して檀原神宮の宮司応接間に神宮と大学の両者の会合を開いたのは、平成二十八年八月六日のことであった。檀原神宮側から久保田昌孝宮司、西野敬一権宮司、相木吉隆禰宜（総務部長、以下肩書や役職名はその時点のもの）をはじめ、特に檀原神宮史の編纂事業に協力する檀原神宮情報化対策委員の方々、宮崎成由教化渉外課長、金澤明信奉賛課員、高鉾義嗣総務課員、日下悠教化渉外課員が出席された。

檀原神宮さまから依頼された出版事業は一つは啓蒙書としての「神武天皇論」、もう一つが「檀原神宮史」（昭和十七年より平成二十八年〈神武天皇二千六百年大祭〉迄）であった。後者については、以下のような項目を列挙された（当日の事項書より）。

イ、戦中の檀原神宮

ロ、敗戦―国家管理を離れて（苦悩の時代）、境内地無償払い下げ、境内地売却

ハ、建国記念の日制定

ニ、御鎮座九十年

ホ、御鎮座百年

ヘ、御鎮座百十年

ト、御鎮座百二十年

チ、神武天皇二千六百年

リ、天皇陛下の御親拝（平成十四年、平成二十八年）

翌月二十九日、久保田宮司と相木禰宜の御両名が本学にわざわざお越しになり、神武天皇論並びに檀原神宮史編纂委員の嘱状伝達式が、本学佐川記念神道博物館会議室において執り行われた。この日に委嘱された本学教員は、神武天皇論に関して清水潔学長、岡田登教授、遠藤慶太准教授、佐野真人助教、檀原神宮史続編の編纂に関して田浦雅徳教授、谷口裕信准教授、大平和典准教授である。なお田浦は檀原神宮史の編纂業務全体の進行と内容の監修の任にあたることになった。また平成三十一年四月より本学に赴任した長谷川恰助教が新たに同月より編纂委員に就任し、力強い援軍となった。

平成二十八年十一月十一日には本学神道博物館会議室において両出版物の編集会議を行い、とくに檀原神宮史の時代区分と各章分担を決定した。その後の編纂過程で分担の変更を加えながら最終的には左記のような章立てと執筆分担となった。

第一章 太平洋戦争下の檀原神宮（長谷川）

第二章 連合国軍の進駐と檀原神宮の維持経営（谷口）

第三章 独立回復より建国記念の日制定まで（大平）

第四章 建国記念の日制定以後（大平）

● 関係史料の収集に努める

檀原神宮史の編纂にあたって我々は大きな方針として二つのことを掲げた。第一に、戦中から戦後の苦難のなかの、檀原神宮のたゆみなき足跡をできるかぎり明らかにした出版物にすることである。第二に檀原神宮が所蔵する関係史料をできるかぎり収集して撮影し、デジタル画像として後世の貴重な史料資産として残し、編纂後も関係史料を利用できるように文書の名称と在り処^あを目録化（データ化）して残すことである。

それは今次編纂事業を契機に檀原神宮研究が進み、より多くの人たちに檀原神宮への理解が深まることを願うからであり、今次編纂はその端緒とならなければならないという強い思いがあった。また何十年後かの次期檀原神宮史編纂事業の円滑な進行のためにも、史料の整理・画像データ化・目録化等は是非とも必要なのである。

檀原神宮内の史料は、残存状況から大別して二つに分けられた。一つは祭儀部や総務など各部署ごとにテーマ別に分類され綴じられ簿冊の形で残存したものである。それらは現に業務の過程で参照しながら使用されているので、保存は極めて良好であった。もう一つは年月が経過して各所にしまわれた史料群で

ある。社務所の会議室、図書室、神宮会館の奥の倉庫、齋館奥の土蔵（これについては後述）などである。

史料のなかでも最も基本となるのは「社務日誌」である。これは実にきれいな形で保存されていたが、どうしても見当たらない年が数年分あったのが残念であった。祭儀部には「官祭綴」「私祭綴」がきちんと残っており、檀原神宮の祭儀に関する貴重な史料である。今次の編纂では祭儀の研究には及ばなかったので、今後研究されるべきだと痛感された。

● 史料整理と撮影

編纂は史料の撮影から始まった。まずは社務所の会議室の書棚に置かれていた資料の簿冊類を他と選り分け、撮影を開始した。会議室と図書室にある簿冊は戦前のものと戦後初期のものが多かったがこれは、戦前と戦後に分類して撮影をおこない、同時並行で会議室の書棚の整理もおこなった。撮影した史料は図書室の空きスペースを利用して保管してある。

史料の撮影は主に会議室で行った。撮影等の作業は令和元年十二月時点で百十六回に及んだ。撮影した簿冊や文書は五〇〇点を超える。簿冊の厚いものは五センチを超えるものもある。撮影するのは、原史料以外に画像として保管することで史料をより確実に後世に残そうという趣旨である。編纂のために閲覧する史料も基本的に撮影された画像をみることにした。

撮影には編纂委員以外では高鉾公子さん（檀原神宮旧職員）に多大なご尽力をいただき、檀原神宮の北村靖彦教化渉外課

員、伊藤英佑同課員にはいつもご助力をいただいた。また一々あげないが桐田貴史君（皇學館大学院生）をはじめ学生諸君にも助けてもらった。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

さて今次編纂事業で撮影以外で最も多くの時間を割き、また最も多くの労力を要したのは前述の古い土蔵の整理である。土蔵には古い史料があるという話をうかがって、是非ともそこに行きましよう、ということと撮影作業のはじまって何回目か二、三人で足を踏み入れたが、あまりの散乱ぶりに、とても少人数では困難とわかり、日を改めて神宮の方や編纂委員十人ほどで整理することにした。

戦前期からの積り積もった土ぼこりや天井からの落下物、虫や紙魚しみの死骸や排泄物の堆積したもの、あるいは生きた紙魚そのものがあつた。全員マスクに軍手を装備して、史料を運び出し、軽く天日干しをして、整理してまた土蔵にしまうことを繰り返した。そこには要・不要の区別なく運び込まれた史料が放置されていた。作業はその日だけでは済まず、その後は少人数で何度か整理に入った。現在この土蔵内部は、かなりの程度きれいに整理保管した。

こうしたまさしく発掘のような作業をおこなった結果わかったことは、実に多くの貴重な史料が「死蔵」されていることであつた。そこで戦前戦後の「警衛日誌」や「宿直日誌」をはじめ編纂に大いに寄与してくれることになる史料群が見つかったのは、何よりもうれしいことであつた。

刊行物の完成はただ課題としては全体の目録化はまだ未完成

の部分がある。これは残された編纂期間でできるかぎり進めたいと思つている。

戦中の絶頂期から、敗戦後の苦難への暗転、しかしそこから文化事業等の展開をはじめ関係者の並々ならぬご努力によってそれを克服し、建国記念の日の制定などを通じて、緩やかではあるが確実に、堅実に進展のあゆみをつづける檀原神宮の歴史は、ある意味で戦中・戦後日本のあゆみの象徴とも言えるものでもあつた。この檀原神宮史続編がひろく江湖に迎えられんことを祈るばかりである。

プロフィール 田浦 雅徳(たうら まさのり)

●昭和二十八年熊本県生まれ。東京大学文学部国史学科卒業後、平成八年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学。博士(文学、東京大学)。平成九年より皇學館大学文学部助教授、教授を経て、現在、皇學館大学特命教授、同大学アドミッション・オフィス室長。

●主な著書、『日本近代史の再構築』（共著）、『伊勢市史』近代編（共著）、『変容する聖地伊勢』（共著）、『日露戦争——戦場外のたたかい』、『三国同盟と松岡洋右』（単著）ほか。『三国同盟と松岡洋右』（単著）ほか。



くぐり初め之儀



丈量之儀・検知之儀



墓目之儀



居合之儀 (上：四方破い/下：居合にて注連縄を断つ)

御鎮座百三十年記念奉祝事業 鳥居修築工事完工報告

年の瀬が迫った令和元年十二月二十四日(火)、鳥居修築工事立柱祭並竣工奉告祭が第一鳥居前にて斎行されました。檀原神宮では令和二年に御鎮座百三十年という節目の年を迎えるにあたり、その主たる奉祝事業として境内に建つ鳥居四基の修築工事を一年間二期に分けて行って参りました。本奉告祭は四基の鳥居全ての完工を締め括る祭典にあたり、参列者をお招きして盛大に執り行われました。

祭典では齋主が祝詞を奏上した後、鳥居修築工事を無事に務め上げられた株式会社瀧川寺社建築奉仕による柱間と柱高を測る所作を行う儀式「丈量之儀」が執り行われました。

儀・検知之儀」が執り行われた後、参列者と共に百メートルの綱を曳く「曳き綱之儀」、引き続き「槌打ち之儀」が滞りなく奉仕され、鳥居完成を奉祝致しました。

祭典の後半にあたる竣工奉告祭では、奈良県弓道連盟奉仕のもと鳥居上空に向かって鎗矢を放ち破い清める「墓目之儀」、並びに真勝流刀道による清破い「居合之儀」が執り行われた後、先導神職の後に続き総勢六十名による「くぐり初め之儀」が行われ、祭典は無事に斎了。令和元年を締め括り、令和二年の御鎮座百三十年に向けて気持ち新たに致しました。